

Ⅱ. 平成 21 年度 F D 専門委員会活動報告

今年度(平成 21 年度)も、昨年度をさらに深化させた F D 活動を行うことができた。学内において、年々「F D」というものが理解され、構成員の協力を得て、このように概ね計画通りに行うことができたことは、本学に F D が定着されつつあることの証しであると確信する。今年度の F D 専門委員会の活動について以下の通り報告する。

A. F D 専門委員会の組織と構成

今年度の委員会構成を次に示す。

○委員長

心理学科教授 坂手照憲

○委員

人間科学研究科長 松本一弥

人間言語学科長 小西弘信

初等教育学科長 岡 利道

人間福祉学科長 木村敦子

心理学科長 植田 智

人間栄養学科長 黒川知則

教養教育部長 宮崎洋一

人間言語学科教授 三熊祥文 (運営委員)

初等教育学科准教授 森 哲之 (運営委員)

人間福祉学科講師 溝渕 淳 (運営委員)

○所掌事務部

統括部総合支援課

原則として、毎月 1 回の専門委員会開催と 2 回の運営委員会開催を予定した。運営委員は、F D に向けた企画とその運営を主とする活動を行うこととした。

B. 今年度の F D 専門委員会の活動記録

4 月から不定期ではあるが、月に 2 回程度の運営委員会と、必要に応じて専門委員会を開催した。昨年度の活動を概ね踏襲し、以下のような時系列で、今年度の活動を実施した。

- 4月：チューター連絡会（GPAと授業評価アンケートの説明）、及びFD運営委員会、FD専門委員会の開催（今年度の活動計画の説明）
- 5月：成績評価とティーチング・ポートフォリオの研究、学外開催のFD研修セミナーに参加
- 6月：前期授業評価アンケートの準備
- 7月：前期授業評価アンケートの実施
- 8月：GPA値の結果を受けて想定される問題などに関する検討
- 9月：成績評価とティーチング・ポートフォリオの学内研修に向けた検討
- 10月：シラバスの加筆修正（上記「成績評価」の結果を反映したもの）
- 11月：後期授業評価アンケートの準備
- 12月：教員による授業の自己点検・評価の準備
- 1～2月：後期授業評価アンケートの実施
- 3月：教員による授業の自己点検・評価、次年度のシラバス執筆、学内研修会で今年度のFD活動報告及び次年度に向けてのFD活動計画の共有

C. 今年度のFD活動及びFD専門委員会活動の内容

昨年度のFD活動を概ね引き継ぎ、活動のさらなる質的深化を目標に、FD専門委員会を中心としながら、学内の理解と協力をはかりつつFD活動を実施した。

昨年度の本学のFD活動における成果は以下の通りであった。

1. 授業評価に基づく、授業の自己点検・評価及びFD活動案の策定
2. GPA制度の導入
3. 授業評価アンケートの電子ファイル化
4. 学士力を意識した授業評価質問項目の設置
5. 新シラバスの構築
6. 学内研修会（FD活動報告）：組織的FD活動の調査と共有、教員のFD活動報告

今年度のFD専門委員会は、上記の1～6のそれぞれについて、今後に向けての課題を抽出し、それらへの対応と諸活動の質的深化をはかった。以下ではそれぞれの活動について、どのような取り組みをはかったか、あるいは、次につなげていく課題を提示していったのか等について述べていきたい。

1. 授業評価に基づく、授業の自己点検・評価及びFD活動案策定の公開

今年度は、本学の専任教員、さらには非常勤教員の方にご理解とご協力をいただき、授業評価アンケートの実施と、これに基づく「授業の振り返り」というプロセスの中で、授業に関する自己点検・評価とFD活動案の策定が行われた。これらの結果や各教員の考察は、より改善された授業方法の展開や授業内容として、次年度以降のシラバスへと具体的

な形で反映していくものと確信する。今年度の「授業の振り返り」も本報告書『文教FD』に掲載している。

2. GPA制度の現状

昨年度GPA制度の導入を行い、今年度で2年目を迎えた。GPA制度の活用、及び発生した課題への対応等、制度の運用に関しては、教務委員会及び学生サポート課が対応することとなった。また、GPA値1.5未満の学生の履修に関する対応について、各学科の1年次生のチューターを中心にGPAに関する研修を行った。

3. 授業評価アンケートの電子ファイル化と課題

学生サポート課の支援を受け、授業評価アンケートの質問及び学生の回答は、ユニバーサルパスポート上で行えるようにした。また、学期開始時及びアンケート実施時に、教員・学生へ授業アンケート操作マニュアルを配布した。これは、昨年度からの課題であった、アンケートへの回答率を上げるため講じたものであったが、結果として、今年度の回答率は前期で44.6%、後期で30.6%であり、昨年度よりも回答率が低下した。その原因を検討した結果、「アンケートへの回答にコンピュータを使用するため、授業時間外に行うことが多く、学生が回答を失念してしまうこと」、「いくつもの授業科目への回答を繰り返して行うことに、負担感が伴うこと」、「アンケート実施の告知の徹底について、教員間で差が見られること」などの要因が挙げられた。今後、回答率向上という課題についてさらなる検討を加え、解決に努めていきたい。

4. 学士力を意識した授業評価質問項目の設置と効果

授業評価アンケートの質問項目に「問10 この授業を受けて、シラバスに到達目標として掲げられている知識や能力を獲得できましたか」「*問10 についてシラバスに示された到達度目標と照らし合わせて、獲得できた能力、あるいはできなかった能力を、具体的に記述してください。」を加えた。これによって、授業を通して教員は学生にどのような力を修得させたいのか、一方学生は、どのような力を修得することができるのかについて明確にすることとした。それらの力は、「学士課程教育の構築に向けて(中央教育審議会、平成20年12月24日)」が示す学士力の内容に準じたものであり、学士力の修得は、社会的に認知できる力を修得している証明にもなる。しかし、この設問を置いたことの意義を理解できていない学生もいると推測されるので、教員が学生に到達目標を理解し易くするとともに、提示されている学士力に応じた到達目標の明示と、授業の実施を徹底する必要があると思われる。

5. シラバスの深化と定着

平成21年度のシラバスには、新たに「到達目標」及び「成績評価基準・方法」の記述欄

を付加した。これにより、各授業を通して学習成果の保証につながるようになり、詳細化された授業計画及び明快な結果の検証が可能なものへと深化させることができた。しかし、学生が「到達目標」の達成を実感できるようにするためには、さらなる内容の具体化や明確化が必要である。また、「成績評価基準」や「成績評価方法」が公正なものであると学生が納得するためには、今後是非とも教材研究を行った上で、その根拠なども含め明確にシラバスに掲載すること、さらには成績評価に関する組織的な研究を進めなくてはならない。

6. 大学研修会におけるFD活動報告

平成22年3月9日に大学研修会が開催され、その中で主要なFD活動について報告を行った。その他、グローバルコミュニケーション学科のカリキュラムの構築と検証について行われた報告も、本学における組織的なFDの一環として認めることができる。学内研修会において、本学のFD活動が報告されることは、今後、学内にさらなるFD活動を促進していくためのきっかけとなっていると考えられる。

以上のように、昨年度のFD活動を引き継ぎ、さらにそれらを深めた今年度のFD活動の成果を検証した。また、この他の成果として、学外で開催されたFD研修会へ専門委員が参加したこと、平成19年度に開始されたFD活動報告書『文教FD』について、今年度も継続して取り組み、学内外の大学HPに電子ファイルの形で、2009年度版を公開することができた。

D. 今年度新たに着手した活動について

前節に述べた活動に加え、今年度は新規に、FD活動の推進による教育力の向上のための教員の職能開発及び学内ティーチング・ポートフォリオのフォーマット作成を模索するための情報収集に着手した。

1. 教員の職能開発プログラムについて

今年度、FD専門委員会は部門目標として「教員の職能開発プログラム」の作成を掲げた。そこでは、本学の教育活動の現状を正確に把握し、地に足のついた形での職能開発を進めていこうとするものである。『文教FD』編集・執筆に伴う情報収集の折、本学には、これまで潜在的に実施されていたFD活動が数多く存在していたことが判明した。そこで、FD専門委員会としては、これらの潜在的なFD活動を顕在化させるとともに、これらの洗練化を推進していくことにした。また、個人レベルでの活動に比して、組織レベルのFD活動の実践が少ないように思われた。しかし、「FDを単なる授業改善のための研修と狭く解するのではなく、わが国の学士課程教育の改革を目的とした、教員団の職能開発として幅広く捉えることが適当である」、さらに、「FDを実質化するには、教員の自主的・自

律的な取組が不可欠である。教員の個人的・集団的な日常的教育改善の努力を促進・支援し、多様なアプローチを組織的に進めていく必要がある。」という中央教育審議会見解があり¹⁾、それらを推進していく必要性を学内に伝えるとともに、本学の状況に応じた、組織的な職能開発を定着させていくための取り組みを開始した。もちろん、これらの実現には相応の時間が必要であることが考えられ、今年度は、このプロセス提示と実現にむけて、本学における現状の把握を中心に、情報収集を通じた基礎固めを行った。

その結果、

- a. 潜在化したFD活動の可視化：各学科から意見を収集し、昨年に加えて新たな活動の可視化が実施された。
- b. 講義参観に関する情報収集：広島県内大学の研修にFD運営委員が参加した。その報告は本報告書に記載されている。今後の大学のFD活動の中でも一つの中心となるであろうこと、また、授業へのチームアプローチの必要性が明確となった。
- c. 組織的なFD活動の現状についての情報収集：多くの学科がカリキュラム改訂や新カリキュラム構築の際に、組織的なFD活動を実施しているのと同様の活動を実施していることが把握できた。このうち、前述の通りグローバルコミュニケーション学科の活動は大学研修会で発表が行われた。

2. ティーチング・ポートフォリオの定式化について

本学における学生による授業評価アンケートの実施については、今しばらくの検証が必要であると思われるものの、上述の通り一定の枠組みを確立したのではないかと評価している。今後は、これらの評価システムを基盤に、各教員が能力を向上させていく際に活用できるような「ツール」あるいは「メソドロジー」の調査研究・開発が求められる。その結果、授業実施におけるPDCAサイクルの更なる強化と教員自身の能力の向上、さらにはそれらの最終的な結果として、本学全体における教育力の向上が実現するのではないかと見通しがもてる。その一例として、教員自身によって活用される、本学版の「ティーチング・ポートフォリオ」の定式化を模索することとした。これは教員が自らの授業の進め方や工夫などを記録し、経年的に把握できるものであり、中央教育審議会の答申によると、「大学等の教員が自分の授業や指導において投じた教育努力の少なくとも一部を、目に見える形で自分及び第三者に伝えるために効率的・効果的に記録に残そうとする『教育業績ファイル』、もしくはそれを作成するに於ける技術や概念及び、場合によっては運動を意味している。ティーチング・ポートフォリオの導入により、①将来の授業の向上と改善、②証拠の提示による教育活動の正当な評価、③優れた熱心な指導の共有などの効果が認められる」ものとされている²⁾。おそらく、「教育力の向上」、「他教科担当者との情報の共有やすりあわせ」、「授業展開方法の蓄積」…等、教育力の向上に際して多方面に活用することが期待できるものとなっている。

今年度は、

- a. 授業評価とPDCAサイクルの定着・検証・改善：定式化の前提としてこれをとらえ、前述の通り、年を追うごとに充実してきているという認識に至った。
- b. ティーチング・ポートフォリオに関する調査への着手：主に文献収集にあたった。また、これに似たものをすでに個人レベルでは作成しているという情報も耳にすることから、今後は前述の職能開発プログラム同様、すでに本学に存在すると想定されるところの、ティーチング・ポートフォリオと同様の機能を果たす記録を可視化していくことが大切であるとわかった。

E. 次年度に向けて

大学におけるFD活動の推進が義務化されたことを受け、これまでの活動を継続させるだけにとどまらず、今後は無秩序・無計画に実施されてきた多種多様なFD活動を取捨選択し洗練化すべきであると考えられる。今後FD専門委員会としても、本学の現状に即した、教育力向上のための手段となるような方法（具体的なツール等）および方法論の掘り起こしや調査・研究、開発等をさらに進めていく必要がある。また、今後の全学的なFD活動とその結果としての本学における教育力向上実現のためには、教務委員会や学生サポート課、教養教育部などをはじめとする大学各部署との連携が必要不可欠である。FD専門委員会がこれらの繋がりの中で機能できるよう、次年度もより多くの情報を収集・発信することを通して本学におけるFD活動への関心や行動を喚起していきたい。

なお、今年度の時点では向こう3年間の活動計画を以下の図の通り設定した。

	2009	2010	2011
自発的FD活動の吸い上げ	・掘り起こしと可視化	・掘り起こしと可視化	・情報の集約と精査
	・授業参観の現状把握	・授業参観の現状把握と調査	・授業参観の試行と評価
カリキュラム検討	・各学科の現状把握	・各学科の試みの検証と支援方法の模索	・組織的FDの実施・評価・再検証
	・他大学等の調査・現状把握への着手	・調査・現状把握の継続と情報の共有	・他大学等の調査・現状把握
ティーチング・ポートフォリオシステムの構築	・授業評価の定着・検証・改善の継続	・授業評価の定着・検証・改善の継続	・授業評価の定着・検証・改善の継続
	・他大学等の調査・現状把握への着手	・調査の継続	・パイロット的な実施と評価

1) 中央教育審議会 答申 本文 39頁

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf

2) 中央教育審議会 答申 用語解説

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_002.pdf